０７／５／２７　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：救いを拒んだ弟子　―　ユダ
聖書箇所：ルカの福音書　２２章２１−２２節

ルカ２２：２１−２２**「しかし、見なさい。わたしを裏切る者の手が、わたしとともに食卓にあります。:22 人の子は、定められたとおりに去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はのろわれます。」**

今日、私たちがごいっしょに見ようとする人物はイスカリオテのユダです。このみことばから私たちが学ぶことは、イエスの愛と、そして、その愛を拒んだユダの間違った愚かな選択です。

まず、このイスカリオテのユダという人物に関してみことばが教えていることは、彼はイスカリオテ・シモンの子、ユダであったということ、また、彼は１２使徒のひとりであったこと、そして、彼の担当は会計でした。お金を預かっていたのです。聖書は彼が盗人であったと教えています。その預かっていたお金を不当に流用したり、使用していたようです。また、このイスカリオテのユダはイエスを祭司長たちに銀貨３０枚で売ったと記されてあり、皆さんもよくご存じのことと思います。そして、ユダはイエスを売ったことを後悔し首を吊って自殺したということまで記されています。使徒１：１８には**「（ところがこの男は、不正なことをして得た報酬で地所を手に入れたが、まっさかさまに落ち、からだは真二つに裂け、はらわたが全部飛び出してしまった。）」**とルカはこのように描写しています。いったいどうなったのか、いろいろな説がありますが、おそらく、彼は首を吊った後その木が折れてこのようなことになったのではないかと、あくまで臆測でしかありませんが、少なくとも、そのようなことが聖書の中に記されてあるこのイスカリオテのユダに関することです。

私たちが今から見て行きたいことは、このユダがどのような選択をしたのかということです。ユダはイエスによって１２使徒のひとりに選ばれました。なんというすごい特権でしょう。イエスがなさったその行為に対して、ユダはイエスとともに歩み続けるという選択をするのです。彼はイエスとともにいようとするのです。そして、このユダ自身のことをよく知っていたイエスは、彼に対して愛を示し続けてくださったのです。しかし、そのイエスの行為に対してユダはイエスを信じないという選択をするのです。彼は悲しいことに、この神の愛を神の救いを拒むのです。

今日、私たちはこのイスカリオテのユダという人物から、彼の失敗から大切なことを学んでいきます。

☆ユダの失敗から学ぶ

１．イエスは最後までユダを招いておられる

ルカ２２章は、イエスがゲッセネマで捕えられる前の最後の晩餐での出来事でした。最後の晩餐の時にこのようなことがイエスによって語られたのです。イエス・キリストはこのとき弟子たちとともに食卓について最後の食事をしておられたのです。驚くべきことは、もうすでに最後の食事のこの席にあって、弟子のうちの一人がわたしを裏切るということをイエスは知っておられ、そのことを知りながらもなお、最後の最後までイエスはユダに愛を示し続けて行かれ、その人に赦しを与えようと彼を招き続けておられたという事実です。２１節にそのことが記されています。**「しかし、見なさい。わたしを裏切る者の手が、わたしとともに食卓にあります。」**。ですから、イエスはこのユダが何を考え、どういう取引をし、これから何をするかをご存じなのです。それでも、イエスは彼に対する愛情を失うことがありませんでした。２２節でこのように言われています。**「人の子は、定められたとおりに去って行きます。」**と、つまり、イエスはユダの罪をご存じであり、そして、**「定められたとおりに去って行きます」**、つまり、わたしがこれから人々の身代わりになるというのは、成り行き上そうなるのではなく、自分の願いと異なることが起こるのでもなく、これから起こることは、まさに、父なる神が定められたとおりのこと、神のご計画であると言っているのです。ですから、イエスはこれから十字架にかかって、そして、人々のために罪の赦しを備えようとされる、イスカリオテのユダがこれからどのようなことをしようとしているのかを知った上で、イエスはご自分のいのちを捨てて行こうと、そして、罪の赦しを備えようとされるのです。ですから、イエスはユダのことを知っていながら、そのユダにも罪の赦しを与える、そのようなチャンスを備えてくださるのです。

２．イエスはユダに悲しみの思いを抱いておられる

２２節の後半に**「しかし、人の子を裏切るような人間はのろわれます。」**とあります。これを読むと私たちは当然だ、イエスを裏切るような者はのろわれてしかるべきだと思います。ところが、ここで使われている**「のろわれる」**ということばは、非常におもしろいことばが使われているのです。これは、復讐とか懲罰というような意味のことばではないのです。私たちはそのように思って納得してしまいます。でもここで言われている**「のろわれる」**というのは復讐の意味をもったことばではなく、悲しみを表わすこと

ばです。嘆き、悲しみを表すことばです。日本語では喜び、怒り、悲しみなどを表わすことば、感動詞です。新約聖書には４６回出てきますが、ある所では「忌まわしい」「哀れ」「災い」と訳されています。ルカ１０：１３では**「ああコラジン。ああベツサイダ。…」**と、その二つの町をイエスが嘆かれた様子が記されています。なぜ、ガリラヤ湖周辺のこの二つの町を見て嘆かれたのか、それは彼らの罪です。イエスはその町を見て非常に嘆かれた、そこで使われていることば、それがこの２２節で使われている**「のろわれます」**ということばなのです。ですから、イエスはユダに対して非常な怒りをもって「何だ！わたしを裏切るのか、それならお前には呪いを与えてやろう」とそのようなことではなかったのです。イエスはこのユダがしようとしていることを知って、心を痛め悲しんでおられたのです。「あぁユダよ、何をしているのだ！」と。つまり、神は一人でも罪人が滅びることを望んでおられないのです。私たちが見て、この人は間違いなく滅びに至ってしかるべき、地獄にふさわしいと言ったとしても、神はそのように思ってはおられません。神は一人の罪人が滅びることに関して、救いなく、罪の赦しもなく、永遠の地獄に行くことを喜んでおられないのです。このユダに対しても、この場にあっても、イエスは彼に対して悲しみの思いを抱いておられるのです。

３．ユダの席をご自分の左側にされた

また、最後の晩餐の時、イエスはユダをどこに座らせたのでしょう？ヨハネの福音書１３：１８−３０に大切なことが記されていますが、２１節に**「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ります。」**とこのようなことを言われました。２２－２６節**「弟子たちは、だれのことを言われたのか、わからずに当惑して、互いに顔を見合わせていた。:23 弟子のひとりで、イエスが愛しておられた者が、イエスの右側で席に着いていた。:24 そこで、シモン・ペテロが彼に合図をして言った。「だれのことを言っておられるのか、知らせなさい。」:25 その弟子は、イエスの右側で席についたまま、イエスに言った。「主よ。それはだれですか。」:26 イエスは答えられた。「それはわたしがパン切れを浸して与える者です。」それからイエスは、パン切れを浸し、取って、イスカリオテ・シモンの子ユダにお与えになった。」**、ということは、シモン・ペテロが語りかけたイエスが愛しておられた弟子はイエスの右側に座っていました。左側にはだれが座っていたのか、イエスが**「パン切れを浸して与える」**ことのできた、イエスのすぐ傍にいた人、イエスの左側にいたのはユダでした。左側の席というのは最も名誉ある席で、大切な客のために用意された席です。おそらく右側に座っていたのはヨハネでしょう。左側にはユダが座っていた、なぜ、イエスはそのようなことをされたのでしょうか？偶然そこに座ったのでしょうか？イエスがあえてユダをそこに座らせたのです。このように、イエスはユダが何を考えているのかを知っていながら、最後の最後まで彼に愛を示し続けておられるのです。

しかも、イエスはこのパンを浸したうえでそれをユダに渡したと、この行為を見てだれも不思議がっていません。「裏切るのはユダだ」とだれも言っていません、というのは、この当時の習慣は、この様に最初にパンを渡す人というのは、最も尊敬に値する人、大切な客で、主人はその人に最初にパンを渡したのです。ですから、皆はこのユダに対してイエスがどのような思いをもっていたのか、逆にそのように思ったのでしょう。なぜなら、自分の左側に座らせ、最初のパンを彼に与えたからです。私たちが覚えておくべきことは、イスカリオテのユダが何を考えていたかということは、何度も言うように、イエスはご存じでした。そのことを知った上でイエスは彼に対する愛を示し続けられました。ヨハネ１３：１１でも**「イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「みながきよいのではない。」と言われたのである。」**と書かれています。その上で、イエスは繰り返し繰り返しユダに対して愛を示されたのです。ユダに言っているのです。「あなたの罪を知っているけれどあなたを赦そう、あなたに赦しを与えよう」と。私たちが考える愛とは違います。私に良いことをしてくれたらあなたを愛しましょうという、条件付きの愛ではなかったのです。ユダがどのような思いをもっていたか、そのことを知った上でなおもイエスは彼を愛し続けた、彼を赦そうと赦しの機会を与え続けたのです。その様な愛情をいっぱい頂いていたはずのユダ、彼はどのような選択をしたのでしょう？

４．ユダの選択

彼の選択は間違った選択でした。彼は悲しいことに、イエスよりも金を愛したのです。金を選択したのです。覚えておられますか？マリヤが非常に高価なナルドの香油をもってイエスの頭に注いだこと、部屋中がそのすばらしい香りで満ちあふれた、そのときユダが、**「何のために、こんなむだなことをするのか。:9 この香油なら、高く売れて、貧乏な人たちに施しができたのに。」**と言っていますが、彼はそんなことは思ってもいなかったとみことばが教えています。ユダはその出来事の後、すぐに出て行くのです。そして、イエス・キリストを売る商談をするのです。マタイ２６章にそのことが出て来ます。マリヤが大切な香油をイエスの頭に注いだ話の後、２６：１４－１６**「そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテ・ユダという者が、祭司長たちのところへ行って、:15 こう言った。「彼をあなたがたに売るとしたら、いったいい**

くらくれますか。」すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。:16 そのときから、彼はイエスを引き渡す機会をねらっていた。」と、イエスがここまでユダに対して愛を示して来られたにもかかわらず、ユダがしたことは、イエス・キリストを銀貨３０枚で売って引き渡す機会をねらっていたというのです。彼はイエス・キリストの愛に応えるのではなく、それよりも金を愛し選択したのです。こんなに愛されていたユダ、しかし彼はイエスよりも金を選択しました。また、このユダはイエスの赦し、イエスの救いを拒む選択をしたのです。ヨハネ１３：２７を見てください。**「彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼にはいった。そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」**、彼がサタンになったというのではありません。サタンの影響を受け、サタンの道具としてこのユダは用いられたのです。つまり、悲しいことは、これだけイエスとともに時間を過ごしたにもかかわらず、彼は神に心を開くのではなく、サタンに対して心を開いているのです。ですから、神に用いられるはずの人物が、用いられてもおかしくなかった人物が、何とサタンに用いられる人物として歩んで行ったのです。悲しいことだと思われませんか？ここまで愛されているのにも関わらず、彼の選択はそういう選択だったのです。そして、３０節**「ユダは、パン切れを受けるとすぐ、外に出て行った。」**と、ユダ自身が自らの選択で、自らの意志で外に出たのです。

Ｉヨハネ２：１９に**「彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。」**とあります。つまり、「出て行く」というのは彼らの意志だったのです。彼らがそのような選択をしているのです。つまり、クリスチャンとともにいるよりもそこから出て行く選択です。なぜでしょう？Ｉヨハネ２：１９では、彼らは救われていないからだと言っています。このユダを見た時に、ユダはこうして使徒たちとイエスといっしょに最後の食事をしていた、そして、イエスは彼に対して愛情を示して行かれた、それにもかかわらず、彼が取った選択はその交わりから出て行くことです。このイエス・キリストから出て行くことです。その後、３０節に**「すでに夜であった。」**とあります。　なぜ、このように書かれているのでしょう？　イエスはヨハネ１２：３５でこのように言われています。**「イエスは彼らに言われた。「まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。」**と、闇と光の話をされています。ユダの選択、イエスはまだ時間がある内に、光があって光の子どもとなることができるそのチャンスがあるうちに、その光を信じなさい、闇の中に留まり続けてはならないと招きを与えておられます。今、私たちはユダを愛してユダに対して招きを与え続けておられるイエスを見てきたのです。ところがユダの選択は、その光よりも救い主なるイエスよりも、闇を罪を選択したのです。悲しい選択が記されています。神ではなくサタンを選択したのです。神の愛、神の救いではなく…。このようにサタンに対して心を開くなら、その人は間違いなくサタンに用いられます。私たちはどちらかに仕えています。神なのか、サタンなのか？そして、私たちがそのサタンの奴隷として歩み続けようとするなら、そして、私たちの生まれながらの主人であるサタンの器として用いられ続けようとするなら、それは可能なことです。サタンはそのように人々を用います。

この間、私たちは福島県会津若松で起こった事件を聞きました。ひとりの高校３年生が母親を殺害するという、余りにもショッキングな事件でした。いろいろな報道の中でこのようなものがありました。この少年の自宅からたくさんのホラー系の DVD が発見された、この少年は「ホラー映画を見ているうちに人を殺してみたくなった」と言っています。また、彼は過激なロックスターの DVD を見ていました。そのロックスターが歌っている内容は、麻薬をほめ称えたり、悪魔を崇拝したり、同性愛を称えたり、反キリスト教を歌詞をもって称えているのです。１９９９年にアメリカ、コロラド州のコロンバイン高校の生徒２人が、銃を乱射して生徒１２名と教師１名を射殺した事件がありました。この２人の少年たちも実はこのグループの歌をいろいろな機会に歌っていたと言われています。皆さん、この歌手はこのように言っています。「あなたの子どもをあなたがより良く育てなさい。もしくは、私があなたに変わって彼らを育てましょう。」と。恐ろしい話だと思いませんか？あえて私がその名前を言わないのは、皆さんが名前を聞いてそのホームページを開かられたらぞっとするからです。つまり、この世の中にあって、神の愛を自らの意志で拒んで、サタンに用いられたいとしている人がたくさんいるということです。サタンがしようとすることは、皆さんをますます間違った方向へと導こうとするのです。

イエスを信じていない皆さん、あなたが仕えているのはこのサタンです。サタンはあなたを永遠の破滅へと喜んで迎えてくれます。なぜなら、自分が永遠の破滅に向かっているからです。しかし、神は、あなたのことをすべて知った上であなたを愛してくださっている、そのすべての罪を赦そうとしてくださっている、そのために、みことばを見てきたように、イエスは神の計画に基づいてこの世に来られ、神の計画に基づいてあなたの身代わりとして十字架で死んでくださったのです。「立ち返らなければいけないのです、神に！」、神の救いを、神のこの赦しを拒み続けていてはならないのです。その選択はあな

たにあると言います。
　ユダが何をしたのか？彼は神の前に心を開こうとはしませんでした、これだけ愛されたのに、彼の選択は神ではなくてサタンでした。その結果、何が起こるのでしょう？
５．ユダが神の愛を拒んだ結果は？
　彼にはさばきが約束されています。使徒の働き１：２５**「この務めと使徒職の地位を継がせるために、このふたりのうちのどちらをお選びになるか、お示しください。」**と、つまり、ユダが抜けた後、一人を使徒に選ぼうということで、２３節にあるように**「そこで、彼らは、バルサバと呼ばれ別名をユストというヨセフと、マッテヤとのふたりを立てた。」**と、どちらがみこころなのかというのです。そして、２５節後半には**「ユダは自分のところへ行くために脱落して行きましたから。」**と、このように記されています。おもしろいことをペテロが言うのです。**「自分のところ」**とは自分自身の場所という意味です。自分の行くべき所に彼は行ったと、ギリシャ語の辞典ではそのように説明を加えています。つまり、ここで言わんとしていることは、彼自身が選んだところへ行った、彼の選び、選択にふさわしいところに行ったということです。その理由は、ここにあるように「脱落した」からです。「脱落」ということばは、不従順とか違反、逸れるという意味です。神に対して不従順、神に対して違反し続けるからです。神に対して罪を犯し続けるからです。だから、その選択にふさわしいところにユダは行ったというのです。ペテロはユダが地獄に行ったと教えています、なぜなら、彼がそれを選択したからです。あなたが救われることを望み、神の前に救いを求めているのにあなたが地獄に行くということはないのです。あなたが地獄を求めているからそこへ行くのです。神はそれを悲しんでおられます。しかし、あなたがその選択をしたからあなたはその選択の場所に行くのです。ユダがそうであったように…。
　ヨハネ１７：１２ではこのように言われています。**「わたしは彼らといっしょにいたとき、あなたがわたしに下さっている御名の中に彼らを保ち、また守りました。彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためです。」**、**「ただ滅びの子が滅びました」**と、なぜこのように書かれているのでしょう？それは彼が滅びを選択したからです。神の恵みを拒み続けその結果、救いを逃してしまったからです。ですから、ユダの選択はイエスよりも金を愛し、救いよりも罪を愛し、天国よりも地獄を選択したのです。そこに問題があったのです。神はあなたにも同じように選択の責任を与えておられます。罪を悔い改めて神の前に罪の赦しを求めて出て行くのか、それとも、罪の中を歩み続けて当然の報いを自分自身に招くのか、どちらかです。
　確かに、こういう話を聞いていると、でも、ユダはイエスの１２使徒のひとりではなかったのか？それなら、どうして彼は救われていなかったのか？と疑問が出て来ます。おもしろいことを聖書は教えています。マタイ２６章に目を留めてください。最後の晩餐のとき、皆が食事をしているときにイエスはこのように言われました。２６：２１－２５**「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちひとりが、わたしを裏切ります。:22 すると、弟子たちは非常に悲しんで、「主よ。まさか私のことではないでしょう。」とかわるがわるイエスに言った。:23 イエスは答えて言われた。「わたしといっしょに鉢に手を浸した者が、わたしを裏切るのです。:24 確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はのろわれます。そういう人は生まれなかったほうがよかったのです。」:25 すると、イエスを裏切ろうとしていたユダが答えて言った。「先生。まさか私のことではないでしょう。」イエスは彼に、「いや、そうだ。」と言われた。」**、状況はこうです。食事をしているときイエスがこの中のひとりがわたしを裏切ると言われた、すると皆はびっくりしたのです。そして、皆はイエスに質問します。**「まさか私のことではないでしょう。」**と、彼らは当然イエスからある答えを期待しています。「あなたではない、あなたは大丈夫だ」と。もちろん、このような言い方をしているというのは、皆、ある面では不安だったからです。自分の罪深さを知って「まさか私ではないだろう？」と思ったのです。２２節と２５節に、弟子たちのイエスに対するその問いかけが出てきますが、違いがあります。**「まさか私のことではないでしょう。」**と皆問いかけていますが、１１人の弟子たちは**「主よ。」**と問いかけています。イスカリオテのユダは**「先生。」**です。なぜ、このような問いかけをしたのでしょう？パウロはＩコリント１２:３でこのようなことを教えています。**「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ。」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできません。」**、つまり、パウロは、聖霊なる神が働き、聖霊なる神がうちにいるなら、その人は間違いなく「イエスは私の主です」と言うのです。救われている人には「イエスは私の主」なのです。そのように告白するのです。これはただ口で言うというということではありません。口で何を言うかなど神の前では意味がありません。問題は私たちの心がどうかです。もし、私たちの心が「イエスさま、あなたが確かに真の神です。あなたは私の罪を赦すことのできる唯一の救い主です。そして私は罪人であり、私は私を救うことができません。救ってください！私はあなたを受け入れて、あなたを信じて、あなたに従って行きたい！あなたは私の

主です。」と、どうしてこのような告白をするのか？どうしてこのように心から信じることができるのか？それは聖霊なる神が働いているからです。驚くべき告白です。弟子たち１１人は皆**「主よ」**と言うのです。同じようにユダも言うことができたはずです。でも、ユダがイエスに対して言ったのは**「主よ」**ではなく**「先生」**でした。彼自身の心の様子をみことばは私たちに教えてくれているのです。私たちは心からこの方を自らの主である、この方が私にとって最も大切なお方である、この方が私の主人であり、私はこの方に従って行く選択をしました。そして、あなたが本当に救われているなら、あなたの内に住んでいる聖霊がそのような告白をもたらしてくれるのです。

確かに、聖書を見たとき「弟子」ということばが何度も出てきています。学びを受ける者とか、先生の指導を受ける者のことを「弟子」と言います。しかし、この「弟子」ということばが使われているところに、さらに言うなら、「弟子」の中に本当の弟子とそうでない弟子が存在していることを、聖書は何度も私たちに教えてくれています。例えば、ヨハネ８章を見ても、そこにはイエスの不思議な発言が記されています。イエスは、イエスを信じたユダヤ人たちに対して**「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。」**と８：３１で言われています。なぜ、信じたと言っている人々に対してイエスはこのようなことを言ったのでしょう？４７節を見てください。**「神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」**。イエスは信じたと告白している人々の心をご存じなのです。口先だけの自称クリスチャンがいるということです。ですから、イエスは３１節で**「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、」**と、このように条件節を用いて話しておられるのです。つまり、本当の弟子、本当に救われている人々の特徴をイエスはここで教えておられるのです。それは、神のみことばに対して忠実に歩み続けようとする人たちのことです。それが特徴だと言うのです。神のみことばに忠実に従って行くなら、結果的に救われるのではなく、本当に救われた人たちはこの様な願いをもって歩んでいる人々だと言うのです。言語学者の A.T･ロバートソン先生は、イエスがこの３１節で言われたことは「あなたのわたしの教えに対するこれからの忠誠は、あなたの現在の告白が真実であることの証明である。そのことを言われたのだ。」と説明しています。つまり、忠実に神のおことばに従って行くということは、あなた自身が言ったことが真実であったのだということを証するということです。だから、みことばが私たちに繰り返し教えていることは、イエスを信じてバプテスマを受けて、信仰を告白しているかもしれない、しかし問題は、本当に神によって救われているかどうかなのです。

１２使徒のひとりイスカリオテのユダは、最後の最後までこの救いを自らの意志で拒み続けました。でも、他の１１人は彼が裏切り者だとは思っていません。彼は自分たちの仲間だと皆思っていました。Ｉヨハネ２：１９に**「彼らは私たちの中から出て行きましたが、…」**とありますが、その人たちは最初からおかしいと思われていたのでしょうか？　皆、出て行った人たちのことを不思議がるのです、なぜ？と。なぜなら、彼らはクリスチャンらしかったからです。多くの弟子たちが確かにキリストに関心をもって、キリストに従うかもしれません。でも、その人たちが本当の弟子かどうかということは、その人の歩みが明らかにするのです。ですから、このようなみことばを見る度に私たち自身に神が問いかけられるのは「あなたの信仰は大丈夫ですか？」ということです。

クリスチャンの皆さん、皆さんを恐れさせようとしているのではありません。もちろん、みことばは私たちを責めて行きます。私たちが神のみこころに沿って生きて行くようにと。しかし、この大切なことを私たちは軽視してはならないのです。私たちの永遠に関することだからです。救われている人の心の中には変化が起こっています。神に従って行きたいとするし、みことばに対してこれを神の助けによって守って行きたいとする思いです。その様な思いが与えられているクリスチャンである皆さん、感謝することです。神はあなたを救ってくださり、新しく生まれ変わらせてくださった、そのことを感謝しながらこの方に従い続けることです。

まだ正しい選択をされていない皆さん、今日、私たちが見てきたように、あなたには大きな責任があります。どのような選択をするかという責任です。最初に読んだルカ２２：２１−２２にはこのように書かれていました。**「しかし、見なさい。わたしを裏切る者の手が、わたしとともに食卓にあります。:22 人の子は、定められたとおりに去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はのろわれます。」**と。マタイ２６：２４には**「確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はのろわれます。そういう人は生まれなかったほうがよかったのです。」**とあります。何を言わんとしているのでしょう？それは、彼らの間違った選択、その愚かさ、また、その間違った選択によるさばきの恐ろしさを表わしているのです。**「生まれなかったほうがよかった」**と思うほどの苦しみがあるということです。神はその警告を私たちに与えてくださっています。間違った選択には神のさばきが約束されています。ですから、皆さん目を覚ますことです。神に対して心を閉ざすのではなく、心を開くことです。

主の愛を拒むのではなく、主の救いを拒むのではなく、その救いをお受けになることです。罪の赦しをあなたに与えようとしてくださっているこの方を拒んではならないのです。このユダのように…。